

『りとむ』創刊二十周年記念号 田中拓也

『りとむ』創刊二十周年記念号が発行された。三百ページを超えるポリリウム、充実した作品群と評論、資料編の「赤光語彙」など重量感ある誌面の中で特に注目した企画が一つある。それは岩内敏行編の『りとむ』とりとむ歌会のことばから』である。一九九八年九月から二〇一一年十二月までの「りとむ」の様々な歌人の発言や文章の中から特筆すべき言葉を抽出したものであり、読み応えのある内容となっている。

・私なら「あわれ」は一生に一度しか使わない。

今野寿美（一九九八年九月歌会にて）

どきりとする名言である。今野寿美という歌人の作歌に対する覚悟がひしひしと伝わってくる一言である。しかも、この発言が三枝昂之の「まだ明けぬ梅雨をひとこと話題にし歌へ戻りゆく一組あわれ」に対する歌評での一言と記されているのを読むとなおさら重みを増してくるように思う。

・歴史の縦軸としての伝統的修辭と、歌のもうひとつの軸である〈われ〉とが交差する地平に新しい燈がともる。そんな表現を僕は夢見ている。

田村元（二〇〇一年一月号）

現在、「りとむ」の俊英として活躍する田村元が第十三回歌壇賞を受賞したのは二〇〇二年二月。すると、この発言は歌壇賞を受賞する直前の田村の決意表明の言葉であることがわかる。当時、

田村は二十代半ば。若い田村が歴史の縦軸と横軸を前提に作歌に臨んでいたことがこの一言からはっきりと伝わってくる。こんなところからも「りとむ」の結社としての方向性が個人にも浸透していることが伝わってくるいい言葉だと思ふ。

・樹を樹として歌うよりはこの樹の下に数百年前の自分を立たせること、樹と空との交信を聞くこと、来世紀に至った時の葉の色を思うこと。

里見佳保（二〇〇一年三月号）

短歌の特性を踏まえた、味わい深い言葉だと思ふ。短歌を通して自然と交歓する瞬間を知っている里見だからこそ、こんな言葉が出てきたのだと思ふ。私は「題詠」の持つ特質の一つも自然との交歓だと思ふがどうか。

・平凡をうたうということと平凡な歌ということの隔たりは大きい。そこに言葉への小さな冒険が必要となってくる。

永田明子（二〇〇一年五月号）

「平凡」という言葉は歌評の言葉としてよく使われる一語であるが、永田の言葉は「平凡」をうたうことと「平凡な歌」を峻別している。「小さな冒険」という表現も見事である。

・短歌は人間の体温を大切にする詩である。

三枝昂之（二〇〇二年七月号）

「人間の体温」という一語が印象的な発言である。短い言葉であるが、三枝にとつて短歌とは何かを述べた名言のように私は思う。まだ、引用したい言葉がたくさんあるが、紙幅の都合上、ここまでにしたい。今回の企画はわずかず三ページであったが、インパクトがあった。編集後記に記された岩内の『りとむ』精神、ここに。」という一言もよかった。